

国家珍宝帳の書体

玄宗期にみられる新様式の受容

川上 貴子(九州大学大学院)

国家珍宝帳は、天平勝宝八歳(756)の聖武太上天皇の崩御に際し、東大寺に献納された天皇遺愛の品々の目録五巻うちの一巻であり、当時における国家最高の公的文書とあってよい。国家珍宝帳にみられる書体については、それがあえて選択され採用された可能性を指摘する杉本一樹氏の見解が、今日の奈良朝書跡研究における新たな視点といえる。本発表はこの観点に立ち、さらに国家珍宝帳の書体採用に積極的な盛唐文化受容という文化的背景を読みとろうとするものである。

国家珍宝帳に記された文字は端正な楷書体である。しかし詳細に検証すると、楷書体のなかにも二通りの書体が確認できる。一つはいわゆる楷書体であり、一つは特異な右払いを含む楷書体である。この特異な右払いについては、王羲之の書体を継承した智永の真草千字文(以下千字文とする)の草書部分にみられる特徴であることが、堀江知彦氏によって指摘されている。

ただし国家珍宝帳の書体に、二通りの書体がみられることに関しては、これまであまり注目されることはなく、先行研究では国家珍宝帳のすべての楷書体に、王羲之系統の書体の影響が見受けられることが指摘されてきた。これに対し発表者は、国家珍宝帳の楷書体と「多宝塔碑」(752)にみられる顔真卿の初期の書体とが酷似していることから、遣唐使の動向もふまえ、唐において最新の様式であった顔真卿初期の書体の影響を国家珍宝帳が受けていることを指摘してきた。しかし顔真卿の評価が高まるのは安史の乱以降であり、それ以前に制作された多宝塔碑の書体が、奈良朝における国家最高の公的文書たる国家珍宝帳に採用されたとするには、不十分であったことは否めない。この反省に立ち、国家珍宝帳にみられる新様式の書体が、玄宗期においてどのように位置づけられていたのかを再検討する。

玄宗期では太宗以来、高宗、則天武后、中宗、睿宗へとおよそ百年に渡って受け継がれてきた王羲之の書体が一変し、それとは異なる豊麗な書体が流行した。この新様式の書体は、玄宗のみならずその周辺にもみられ、多宝塔碑の書体も、玄宗期の楷書体の特徴を示す新しい書体の一つととらえることができる。

そこで発表者は、国家珍宝帳の書体の玄宗期における位置づけを明らかにするため、玄宗やその周辺の書、また顔真卿自身の書体の変化などから新様式の楷書体について再考する。さらに当時の文化的背景から奈良朝での受容意識を検証することによって、国家珍宝帳にみられる草書的要素を持つ楷書体とそれ以外のいわゆる楷書体、すなわち奈良朝における伝統的な王羲之の書体と玄宗期における新様式の書体が重層的にみられることこそが、国家最高の公的文書としての国家珍宝帳の書体の特徴であった可能性を改めて提示したい。